トレイル文学と「場所の感覚」
—アパラチアン・トレイルと現代アメリカ文学—

星野　勝利

Stand in a woods and you only sense it. They are a vast, featureless nowhere. And they are alive.
—Bill Bryson, *A Walk in the Woods*, 1998

As I walked the Trail, every mountain I went over became a part of me.
—Kelly Winters, *Walking Home*, 2001

I once read that "Moose" was the last word from the lips of the dying Henry David Thoreau.
—Robert A. Rubin, *On the Beaten Path*, 2001

1. はじめに

アメリカ合衆国には「トレイル(trail)」ということばがよく似合う。ミズーリ州インデペンデンスからロッキー山脈を越えて太平洋に到る道で、開拓の歴史を受け継ぐ「オレゴン・トレイル(Oregon Trail)」。スペイン領時代からメキシコやカリフォルニアとミズーリ川周辺の開拓地を結んだ通商路「サンタ・フェ・トレイル(Santa Fe Trail)」。アパラチアの故郷を追われたインディアンのチェロキー族が、苦難の涙を流しながらオクラホマに向けて辿った「トレイル・オブ・ティアズ(Trail of Tears)」（涙の道)。よく知られるこれらのトレイルは、それぞれが固有の歴史と固有の背景を抱える。

アメリカ人の特性の一つとして「モビリティ（流動性・移動性)」が指摘される。住居や土地所有のモビリティ、職業や地位のモビリティなどである。アメリカ人に顕著なこの特質は、北米大陸西部の未開の「荒野（wilderness)」の存在と無関係ではない（津神、18)。ターナーが提示したいわゆるフロンティア理論によれば、アメリカ人の精神構造や社会構造の基本的な部分は、この「荒野」との関係の中で形成されてきた。

形成の過程は必ずしも単純な軌跡を描くものではなかった。たとえば、１７世紀

東部ニューイングランドの詩人マイクル・ウィグルスワースにとって、この「荒野」は、そこへの「モビリティ」を誘発するような魅惑的な場ではなかった。むしろ、その対極としての「地獄」や「悪魔」の世界であった (Smith, 3-4)。

A waste and howling wilderness,
Where none inhabited
But hellish fiends, and brutish men
That devils worshiped.

しかし、時代を下ると、この視座も変化する。18 世紀の詩人ティモシー・ドワイトの目には、この「地獄」や「悪魔」の世界が、一転して、祝福された「天国」、目指すべき「ホーム」となる (Smith, 10)。

All, hail, thou western world! by heaven design'd
Th' example bright, to renovate mankind.
Soon shall thy sons across the mainland roam;
And claim, on far Pacific shores, their home....

遙か太平洋まで視野に入れたこの視点は、時代を下って 19 世紀に到ると、さらに一層強固なものとなる。「開拓者よ、おお開拓者よ (Pioneers! Oh, Pioneers!)」で「荒野」の開拓者への熱い想いを歌ったホイットマンは、「インドへの旅(Passage to India)」では、ドワイトと同様、太平洋の彼方の地インドを視野に入れ、「大道の歌 (The Open Road)」では、目の前にひろがる長大な「道(road)」に自ら歩みでる存在となる。

Afoot and light-hearted I take to the open road,
Healthy, free, the world before me,
The long brown path before me leading wherever I choose.

「インドへの旅」や「大道の歌」にアメリカ的モビリティの典型が見られるとすれば、その具体的表象は、「旅(passage)」であり、「道(road)」であり、「路(path)」である。いずれも「トレイル」に類似することばである。アメリカ文学には、これに関わる作品が少なくない。隻脚の船長が鯨を追って七つの海を旅する『白鯨』、少年ハックと奴隷ジムがミシシッピーを下る『ハックルベリ・フィンの冒険』、貧しい家

族がオクラホマからカリフォルニアまで夢を求めて移動する『怒りの葡萄』、バスや車やヒッチハイクで若者が移動で激しく移動する『路上』。いずれも「旅」や「道」の世界と深く関わる作品である。

アメリカ的「トレイル」もまた文学と関わる。その関わり方は、具体的にどのようなものか。また、その場合、「トレイル」としての一個の「場」は、はたしてどのような意味を持つものなのか。

2. 旅行文学とアパラチアン・トレイル

文学のジャンルの一つに旅行文学がある。文字通り「旅」を素材とする文学（書き物）である。歴史は古く、射程も広い。エリック・リードによると、西洋旅行文学の最も古いものは、紀元前約2500年頃のウルクの王ギルガメシュの旅を歌ったギルガメシュ叙事詩(Gilgamesh Epic)である（リード、10)。ギルガメシュの旅は、英雄としての名声と栄誉を求める冒険の旅であった。この叙事詩以降、歴史的には無数の旅の書き物が残される。エデンの園から旅立つ旧約のアダムとイブの物語、地中海を行くイリアッドとオデッセウスの旅、中世のおびただしい騎士物語など、旅の模様はさまざまであるものの、いずれも旅を語る書き物である。

20世紀アメリカで形成された「アパラチアン・トレイル(Appalachian Trail)」は、古代ウルクの地でもなく、エデンの園でもない。騎士が歩んだ中世都市の街道でもない。ベントン・マッケイの「地域開発計画」を出発点として形成された森の中の道、すなわちアメリカ東部アパラチア山脈を南北に縦断する長大な登山道である(注1)。第二次世界大戦後に完成し、公的にも認定されたこの登山道（ハイキング・コース）は、歴史的に見て、文学の世界と無縁ではない。18世紀の植物学者ジョン・バートラムは、アパラチア地方の植物の生態を観察するとともに、この地の風土やインディアンの生態を旅行記に詳細に書きとどめているし、植民地バージニアについて記したトマス・ジェファソンの書き物もこの地に関わるものである。ニューイングランドの山岳地帯を素材とするホーソンやメルヴィルの物語もこの例外ではないし、ニューハンプシャーやバーモントの自然を歌ったフロストの詩もアパラチア山脈という広大な地理的空間と関わるものである（Marshall,6–7)。

アパラチア山脈に関わる過去の書物はさておき、現在では、「アパラチアン・トレイル」それ自体を直接的対象とした書き物も少なくない。これらの多くは、このトレイルを歩くこと、すなわちの「旅」することについて、様々な角度から記したものである。この意味では、これらの書き物は、ギルガメシュ叙事詩や旧約の物語あるいは中世騎士物語に連なる「旅行文学」の一つである。

ビル・ブライソンの『森の旅』(Bill Bryson, *A Walk in the Woods*, 1998）は、中

年の二人の男性のアパラチアン・トレイル体験記である。この作品はいくつかの点でマーク・トウェインの『ハックルベリ・フィンの冒険』を想起させる。もちろん二つの作品には相違点もある。前者は森（トレイル）の旅であるのに対し、後者は川（ミシシッピー）の旅である。前者の旅がジョージアからメーンへ向かう北上の旅であるのに対し、後者は、ミシシッピーを下る南下の旅である。中年男二人の道行きは、笑いとユーモアに溢れたもので、さながらドン・キホーテとサンチョ・パンサの旅の趣である。しかし、二人の人間が旅をする構図そのものは、ハックとジムの川下りのそれに類似する。

しかも、『森の旅』の冒頭には、読者に向けたことばが配されている。内容はありふれたもので、「本書は著者の体験を語るものであるが、人物名などはプライバシー保護のために変えてある」というものである。ただし、著者は、これを「拒否の言葉」として記している。『ハック』の巻頭には、読者に向けた「警告のことば」が置かれている。「物語に動機をさがすものは告訴、教えを求めるものは追放、筋書きをほしがるものは銃殺」という物騒なものである。ユーモア作家トウェインの面目躍如であるが、『森の旅』冒頭の「拒否の言葉」は、なにやらこの告訴と追放と銃殺を予告する『ハック』の「警告」のことばのパロディとなっている趣がある。

中年男二人の旅は、トレイル全体を数ヶ月かけて一気に踏破するいわゆる「スルー・ハイカー（thru-hiker）」の旅ではない。折に触れトレイルへの出入りを繰り返すもので、気ままな旅である。物語はこの次第を、おもしろおかしく、ユーモアあふれる視点で語る。ただしこの旅は、これだけでは終わらない。肥満体の同行者との涙と笑いの道行きは、同時に、アパラチアン・トレイル自体の探求の旅でもある。旅の次第を喜劇的に語る物語であると同時に、客観的視点から、トレイルの歴史や地理、気候や風土、動物や植物、登山者の生態、地域開発との関係などを語る科学的探求譚である。

このような作品としての『森の旅』の語り手は、著者自身と限りなく重なり合う。作中人物の名前は虚構化されているものの、語り手自身が認めているように、本書は著者の個人的体験に基づく物語である。注目したいのは、これを語る時の語り手（著者ブライソン）の視点のありようである。とくにトレイルについて語るときのそれである。たとえば、アパラチアン・トレイルに入った動機のひとつは、酸性雨による森の消滅の危機であったという。これを語る著者のことばは、きわめてエコロジカルなものであり、真摯で、かつ悲劇的でさえある。

> And there was a more compelling reason to go.... If the global temperature rises by 4℃ over the next fifty years, as is evidently

possible, the whole of the Appalachian wilderness below New England could become savanna. Already trees are dying in frightening numbers.... Clearly, if ever there was a time to experience this singular wilderness, it was now. (4)

アイオワで生まれ、ジャーナリストとして20年以上をイギリスで過ごした著者は、「森」や「自然」や「荒野」がアメリカで果たしてきた役割を十分に承知している。とりわけ「荒野」が果たしてきた役割は大きい。ウォールデン湖畔の「森」と「自然」のなかで平和な生活を体験したソーローが、メーン州のカターディン山の「荒野」で体験した「こころの底からの狼狽感」(45) は、その証左である。人々の心を「300年間不安にさせてきた」(同) この「森」や「荒野」は、克服されるべき対象であり、都市近郊の「森」に生きた先達ソーローの視座は、「なんとも退屈で鼻持ちならないもの」(同) である。著者がアパラチアの「森」に入った背景には、このような思いがあった。

ただし、『森の旅』の視座は、このようなアメリカ的「森」や「荒野」をすべからく維持すべきというものでもない。非営利団体 ATC (Appalachian Trail Conference) を中心に維持管理される現在のトレイルの在り方は、著者の見るところ、トレイルと人との接触を極力避ける視点に立つものである。この視点は、アメリカ人の偏向した自然観を示すものであり、完璧に人工化するか、あるいはそのまま放置するか、という「二者択一性 (either/or proposition)」(200) を内在させたものである。ヨーロッパの都市公園の快適な空間を体験した著者にとって、公園的なものは、第一に快適な空間でなければならない。したがって、アパラチアン・トレイルも、「すべてが荒野ではなく、草を食む牛や耕された畑が散在するようなもの」(同) であることが望ましい。レクリエーションの場である限り、そのあるべき姿は、適度に管理された牧歌的な世界である。

ただし、これは、ヨーロッパ体験によりもたらされた感覚でもある。長期にわたる山行きから下界に降りた語り手は、最終的に次のような感懐を胸に抱く。旅行文学としての『森の旅』が最終的に確認するのは、「森」と「自然」と「荒野」が、現代のアメリカにおいても果たしているその不思議な力の再発見である。

I gained a profound respect for wilderness and nature and the benign dark power of woods.... I discovered an America that millions of people scarcely know exists. (274)

3. 救済としてのトレイル

かつてファラオが支配した古代エジプトは、地中海地方に住む人々にとっては哲学的巡礼の中心地であったという。古代ギリシャやローマの人々にとって、エジプトの神オシリスは、生活の糧としての食料の産みの親であるだけではなく、占星術、天文学、数学、音楽等、いわゆる学問の世界の産みの親でもあった。人々にとってナイル河畔の地は、叡智の泉の涌く場所であり、そのような聖なる場所として、人々はこの地を訪れることになる。いわゆる巡礼の始まりである（リード、179)。

聖なる場所あるいは霊的な場所を訪ねる旅は、洋の東西を問わず、古くから行われてきた。パレスチナやメッカへの巡礼の旅はこの例であるし、四国巡礼やお伊勢参りも同様である。この旅は、文学の格好のテーマともなる。チョーサーの『カンタベリー物語』(1393) は、聖地カンタベリーに向かう巡礼一行が紡ぎ出す物語集であるし、バニヤンの『天路歴程』(1678) は、巡礼の旅に出る一組の夫婦の心の内奥を語る寓意物語である。

ケリー・ウィンターズの『ウォーキング・ホーム』(Kelly Winters, *Walking Home*,2001) は、一種の巡礼物語である。巡礼の場は、アパラチアン・トレイルである。スルー・ハイカーとして長大なこのトレイルの踏破を目指す一人の女性が、同時に、森の中を歩む一人の巡礼となる。

『天路歴程』の主人公クリスチャンは、ある日突然、妻を捨てて巡礼に出る。『ウォーキング・ホーム』の語り手も、ある日突然、夫を捨てて、アパラチアの森に入る。背景には、夫との心理的離別がある。離別には、複雑な経緯がある。これらについて語り手は、率直に語る。幼児期の父親との生活、成年時の放浪、同性愛体験、不幸な結婚生活、等々。これらについて語り手は、赤裸々なまでに率直に語る。語ることが、宗教的告白と化している趣もある。

この語り手にとって、確かなことは、アパラチアへの旅が、一つの「場所」を目指す旅であることである。この「場所」とは、「情緒的、心理的、精神的な場所」、すなわち「自分が辿り着くべき場所」(8) である。具体的には、自分にとって「家（ホーム)」(219) となるべき場所、である。したがって、トレイルを辿ることは、「どのような場所であれ、そこに辿り着くことを信じながら、家を目指して巡礼の旅をすること (Traveling home, trusting this pilgrimage to lead me there, wherever it may be)」(219) と同義となる。

「ホーム」という「場所」を求めて歩く中で、語り手はさまざまな体験を重ねる。はるか北の終着点メーン州カターディン山を目指して連日山を歩くことの苦しみと楽しみ、女一人の山旅の怖さ、襲ってくる怪我や病気、見あたらない山小屋を求め

て文字通り泣きながら歩く体験、人との出会いと別れ、トレイルを横断する道路でのヒッチハイクの体験、等々。これらの体験とともに、内面の世界、心の世界、感覚の世界も、率直に語られる。快晴微風の山頂でも拭いきれない「こころの平和な充実感を維持すること」(93) への不安感、山に入って約1ヶ月後、バージニアのダマスクス近辺で感じ始めた「自分の中で何かが変わりはじめている」という「地下深く流れる川」(141) のような微妙な感覚、「生きて、感じて、深く感知すること—肉体的にも、情緒的にも、精神的にも重荷を下ろし、笑い、歌い、交わること」(216) という、自分の目指すこころの世界。

ブライソンの『森の旅』に比べれば、『ウォーキング・ホーム』は、はるかに主観的、情緒的である。ときには感傷的でさえある。作中で語り手は「メンタル・エコシステム」(317) ということばを用いる。自己の精神を安定させる情緒的システムとして、である。これによると、彼女の「メンタル・エコシステム」が受け入れる人間は、「宗教的熱狂者、政治的過激派、暴徒、そして不法侵入者」(同) などである。『森の旅』が自然環境としてのエコシステムに目を向けているとすれば、『ウォーキング・ホーム』の視線の先にあるのは、人間中心の世界である。この意味でこの書は、エコセントリズムというよりも、むしろホモセントリズムに傾斜した書である。

「旅」(travel) の語源 "travail" には、「苦労、苦痛、心痛、陣痛」などの意味がある (リード、7)。否定的な意味を内包したこの概念は、「旅」に内在する古典的特質を示唆する。「旅」とは、本来、「苦労」や「苦痛」と背中合わせであるが、このような概念は、時代とともに、「自由」や「開放」あるいは「快楽」の意味を付加していく。現代では、「旅」の意味が、一般的に後者に傾斜していることは自明である。

『森の旅』の旅は、現代的旅である。中年男二人の旅路は、楽しく愉快な開放性に満ちみちている。一方、『ウォーキング・ホーム』の旅は、明らかに古典的である。巡礼の旅を強く意識する語り手は、道中ときには涙を流し、ときには賛美歌 ("Amazing Grace") に口にする。ところが彼女は、旅の終点となるべきカターディン山を目前にして、突然トレイルから下りる決断をする。半年近く歩き続けてきたトレイルから、である。理由は明確である。「巡礼の目的地として目指した場所、その場所に到達したから (I've reached the "place," the place I vowed to go, the goal of the pilgrimage)」(311) である。現実にはどのような場所であれ、彼女が目指した場所は、「骨の奥底 (deep down in my bones)」で「完璧さ(completeness)」(同) を感じ取ることができる場所であった。このような場所であれば、その場所は、必ずしも地図上の終着点でなくてもよかった。

彼女にとって「場所」とは、こころの世界、精神の世界にほかならない。『天路歴

程』のクリスチャンのように、あるいはその妻クリスティアーナのように、彼女はただひとり、アパラチアの森に入る。延々と続く森の道は、たしかにサタンや悪霊の跋扈する世界であり、克服すべき苦難の道であった。しかし、彼女にとってこの道は、自分の血肉と化すべき道、しかも、自己救済の場となる聖なる道でなければならなかった。森の中で目指す「場所（ホーム）」をついに発見した彼女は、次のような感覚に襲われる。

> I feel huge, as if every mountain I've walked over is inside me, and no one can ever take it away or make me feel small again. (311)

4. 虚構としてのトレイル

チョーサーの『カンタベリー物語』は巡礼物語である。四月のある日、ロンドンの旅籠に集まった29人の巡礼が、旅の退屈しのぎに、それぞれ個別の物語を語る。巡礼のなかには、騎士あり、従者あり、粉屋あり、百姓、商人、料理人あり、船乗り、修道士、医者もあり、さらに、機織り女、免罪符売り、司祭、修道士、学生ありと、王様と乞食を除く当時のイギリス社会の構成員を、ほぼ網羅する多彩な顔ぶれとなっている。この巡礼たちが、宿主の司会のもと、それぞれ自分の物語を開陳する。これが中世イギリス最大傑作の基本構造である。

ロバート・ルービンの『踏みならされた道』(Robert Alden Rubin, *On the Beaten Path*, 2001）は、中世の大作『カンタベリー物語』をかなり意識した作品である。著者ルービンは、新婚旅行として、徒歩によるカンタベリー詣でを実際に試みただけではない。作品中でも著者は（上記二作品と同様本書も著者自身の体験を一人称で語る構造を持つ）中世イギリスのこの物語に触れる。四月のある日、日々の仕事をなげうってアパラチアン・トレイルに向かった著者は、次のように、『カンタベリー物語』冒頭のことば「四月の大地に降る心地よい雨が三月の冷たい大地に深くしみ込むとき・・・」を思い浮かべる。

> April seems a good time for penance and fresh start. It's when Chaucer wrote about Canterbury Pilgrims, who from every shire's end sought the road from Winchester known as the Pilgrims' Way:
>
> *When April's sweet showers pierce root-deep the dry March chill,*
> *when small birds improvise their songs and sleep wide-eyed*

through the night,
then people long to go on pilgrimage,
and pilgrims seek strange shores in scattered lands. (20)

これだけではない。山に入る当人は、すっかり詩人気取りである。アパラチアン・トレイルでは、ハイカーがニックネーム（トレイル・ネーム）でお互いを呼び合うことが習慣として定着している（Luxenberg、14)。チョーサーの詩を思い浮かべつつ山に入る本人は、オンライン詩人グループのひとりとしてすでに使用していたニックネーム「へぼ詩人（Rhymin' Worm)」を、自分のトレイル・ネームとして迷わずに選択する。日頃から現実に詩作を試みている本人は、山小屋の宿帳にも「へぼ詩」を書き残すことを日課とする。たとえば次のような詩である。

The Worm went south to Springer Mount,
burning all his ridges,
his next six months a series of
Appalachian ridges. (6)

詩の出来映えはさておき、そのこころは、すっかり旅行く芭蕉である。詩人としてのこの視座は、作中至る所に顔を見せる。エピグラムには、チョーサーやエリオット、バニヤンやホイットマンのことばが並び、マロリーの「アーサー王物語」の聖杯伝説の話（69）や、ミルトンの『失楽園』のサタンの話（101)、あるいはジョイスの『ユリシーズ』のモリー・ブルームのことば（102）などが、道行きの語りの中で姿を見せる。詩人にとって個人的に身近な存在であった作家アニー・ディラードの「ティンカー・クリーク」の風景の話（105）なども、さりげなく言及される。森の中での創作行為だけでなく、語り手の意識の流れそのものも、きわめて文学的である。

この意識は作品構造にも反映される。本書で目立つのは人間観察の豊かさである。自分を送り出す妻のこと、同行者のこと、山道で出会うさまざまな人のことなど、語り手としての詩人は、これらの人々について、豊かな人間観察を展開する。この意味では、『ウォーキング・ホーム』と同様、本書はホモセントリックな傾向の顕著な作品である。ところが、ホモセントリックなこの観察は、同時に、きわめて文学的な観察でもある。

たとえばこの語り手の目には、山で出会うさまざまな人々は「山道を曲がる毎にその人の姿が見えてくる物語の中の登場人物（characters in a story that will unfold

with each new turn in the trail)」(18) にほかならない。しかも、トレイルを歩く行為自体も、この詩人にとっては文学的行為にほかならない。日々反復される山歩きは、一定のリズムを持つものであり、このリズムは、「夜明け」「朝」「昼」「晩」という四つの枠組みで繰り返されるものであり、内容的には、旋律、変奏、対位法、クレッシェンド、ディミニュエンド、アレグロ、ラルゴ、モデラート等と、音楽的リズムとも連なるものである。ところがこのリズムは、詩人の見るところでは、「物語のリズム (story's rhythms)」(31) にほかならない。毎日体験する新たな出会いや別れの営みは、つまるところ、反復される「物語(story)」なのである。

このような目で語られる本書は、いわば文学という枠組みを通して語られるアパラチアン・トレイル物語である。中味は多様である。通学する子どもたちの姿に無機質な未来のサラリーマンの姿を見てしまった時の心理的衝撃、ニューヨークのジャーナリズムの社会を捨ててトレイルを選択した自分の行動、トレイルで出会った人々のこと、若者のこと、環境学者のこと、ドロップアウトする者のこと、山小屋管理人のこと、そして、天候のこと、風景のこと、動植物のこと、そしてまた、自分を送り出してくれた妻のこと。自称「へぼ詩人」は、心の世界を明かすとともに、これら多様な「物語」についても雄弁に語る。

ただしこの語りは、このような内容で終始するわけでもない。ブライソンの『森の旅』のように、詩人の目は、アパラチアン・トレイルそのものの在り方や役割についても向けられる。山に入って約1ヶ月、ノースカロライナのグレート・スモ．キィー・マウンテン国立公園を北上する詩人は、酸性雨と昆虫により荒廃した枯れ木の山肌に強く心を打たれる。山に入って約4ヶ月、ペンシルヴァニアのブルー・マウンテンを下り、デラウェア川の近くに達した語り手は、そこで亜鉛汚染の現場を目にする。目に入ったその世界は「腐敗物の集積したトールキエンの『ロード・オブ・ザ・リング』の地獄の世界」(154) にほかならないものであった。

終着点カターディン山を前にして、詩人は次のように思いめぐらす。アパラチア山脈を貫く長大な森の道を旅することは、「荒野」を夢見ることに等しいことであり、これは、アメリカ人にとっては、幼児期から繰り返し刷り込まれてきた「もっとも原初的な物語」、すなわち「国家的物語」にほかならない。

> Perhaps, all along, we have been dreaming of *wilderness*, of that *most primeval of stories*. If you go to the *wilderness*, if you climb to the mountaintop, if you sail away to the forest savage, surely an answer will present itself.... It's *the national story* we were taught while growing up, after all. the Pilgrim fathers, the great push west, Lewis

and Clark, Daniel Boone, Brigham Young. (223, my italics)

5. おわりに

『森の旅』でブライソンは、19 世紀アメリカの風景画家デュランの絵「類似の精神」(Asher Brown Durand, *Kindred Spirits*, 1849) に触れる。未開の峡谷の峨々たる風景と、突き出た巖の上に立つ二人の人物の絵である。絵の舞台はキャツキル山の峡谷、たたずむ二人は、詩人ブライアントと風景画家トマス・コールである(Novac, 15)。ブライソンはこの絵の背景に注目する。木の葉越しにかすかに姿を見せる遠方の山々の青くかすんだ山並みの風景、未だ人の手の入らない崇高（サブライム）な自然の世界である。この世界を前にすると、ブライソンは、そこに踏み込みたいという思いに強く駆られるという。この思いの強さは、「人に話すことは不可能」(116) ともいう。

19 世紀アメリカにおける「西」の世、「自然」の世界、あるいは「荒野」の世界は、夢と希望の明るい世界であった。17 世紀のピューリタン詩人が「悪魔」の住む世界とした「荒野」は、19 世紀においてはその役割を逆転させている。デュランの絵「類似の精神」は、アメリカの自然を謳った詩人ブライアントとハドソン川近辺のピクチャレスクな風景を好んで描いた風景画家コールの精神の類似性を示唆する。未踏の山並みに熱い視線を向ける精神である。

1842 年の夏、ニューイングランドの奥地を旅したボストン生まれの青年フランシス・パークマンは、未開の奥地の風景を愛でるとともに、そこに住み始めた「豚のように粗野で卑しくて愚かな輩（やから）たち」のことを半ば軽蔑の目で記している。しかし、後に『オレゴン・トレイル』(1847) の作者となるこの青年は、西方にひろがる「森」の世界に熱い思いを寄せ、「私の思いは常に森にあり、森へのあこがれで寝ても覚めても夢見心地であった」と記している(Smith, 53-54)。

アパラチア山脈は、アメリカ大陸西部の世界ではない。アパラチアン・トレイルも、オレゴン・トレイルやサンタ・フェ・トレイル、あるいはトレイル・オブ・ティアズ（涙の道）のように、西に向かう道でもない。アメリカ東部を縦断する南北の道である。形成されたのも 20 世紀に入ってからである。ただしこの道はアメリカの歴史を反復する道である。そこを歩むブライソンやウィンタ．ズやルービンがいずれも「類似の精神」の持ち主であることは確かである。

注

1. "The Appalachian Trail, the longest continuous recreational footpath in America, perhaps in the world, links together all the disparate but neighborly Appalachian mountains and peoples. It originates (if you're headed northward) at Springer Mt. in northern Georgia and terminates, if you walk all 2,150-some miles, atop mile-high Mt. Katahdin in northern Maine. Passing through fourteen states, it serves the recreational needs of the most intensely populated region of the United States. The result both of a grand vision of one bold land-use planner- Benton Mackaye, of Massachusetts and Washington, D.C. and of endless hours of labor by thousands of volunteer and government workers, The Appalachian Trail is a national treasure " (Emblidge, *The Appalachian Trail Reader*, p.viii).

参考文献

Bryson, Bill. *A Walk in the Woods: Rediscovering America in the Appalachian Trail.* New York: Broadway Books, 1998.

Emblidge, David, ed. *The Appalachian Trail Reader.* New York: Oxford University Press, 1996.

Luxenberg, Larry. *Walking the Appalachian Trail.* Mechanicsburg, PA: Stackpole Books, 1994.

Marshall, Ian. *Story Line: Exploring the Literature of the Appalachian Trail.* Charlottesville: University of Virginia Press, 1998.

Novac, Barbara. *Nature and Culture: American Landscape and Painting, 1825-1875.* New York: Oxford University Press, 1980.

Rubin, Robert Alden. *On the Beaten Path: An Appalachian Pilgrimage.* Gulford, CT: The Lions Press, 2001.

Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth.* Boston: Harvard University Press, 1970.

Winters, Kelly. *Walking Home: A Woman's Pilgrimage on the Appalachian Trail.* Los Angels: Alison Books, 2001.

津神久三『アメリカ人の原像—フロンティアズマンの系譜』(中公新書、1985)。

エリック・リード (伊藤誓訳)『旅の思想史—ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』(法政大学出版局、1993)。

(岩手大学教育学部英語教育講座)